

---

# 黒の組織（やつら）に響く鈴の音

さばら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の組織くろいしやに響く鈴の音

### 【コード】

N0280A

### 【作者名】

ちばら

### 【あらすじ】

コナン君が夏の風物詩風鈴の音を聴いていたとき、震えを感じました。それは、彼の心の中にあの仲間が映ったからです。これは、夏の日のコナン君の心理描写です。

俺は江戸川コナン。

俺の正体は、高校生探偵の工藤新一だ。

本格的に夏が到来して、クーラー、扇風機が欠かせない季節になっている。

だが、俺が真つ先に思い浮かべるのは風鈴だ。

待てよ……あの音は何なんだ？

もしかして、黒の組織<sup>やっかい</sup>接近の予感が……？

これが危ないぞ！！

7月下旬、俺が夏休み入った日の夕方。

探偵事務所の窓に1つの風鈴が提げられていた。

風鈴「チリン、チリン！！」

コナン「ただいま！！わっ！！風鈴だっ！！綺麗だね！！」

蘭「おかえり、コナン君。実は、母方の叔母さんから貰った新しい物よ。柄が綺麗で特に女性に人気なのよ。」

コナン「いいねっ！！僕もずっと見つけていたいよ。」

小五郎「おおっ！！暑苦しい夏に爽やかさを与えてくれるよな。俺も好きだぜ。」

蘭「ねっ、暑さを忘れさせてくれるでしょ。でもお父さん、ファッションに対してはどうなの？」

小五郎「そ・それは………？」

コナン「（ふふふ。これじゃいつもの調子だぜ。）」

風鈴「チリン、チリン！！」

夕食後、俺は風鈴の音を聴きながら夜空を眺めていた。

風鈴「チリン、チリン！！」

風鈴の音を繰り返す聴くに連れ、俺が奴等が持参する鈴の音を思い

出した。

コナン「……………(怯)!!」

蘭「どうしたの、コナン君？」

小五郎「おいコナン、折角の楽しい夏の夜が台無しだぜ。」

コナン「べ・別に何でも無いよ。」

7月末の昼、俺は博士と灰原から奴等に関する重要な情報が手に入ったと聞き、慌てて博士の家に向った。

そのとき、博士の家でもあれを提げていた。

風鈴「チリン、チリン!!」

コナン「(もしかして、奴等がいるのか?)」

哀「いらっしやい。びっくりしないで。」

阿笠「驚くことないじゃろ?」

コナン「灰原、博士!!本当にびっくりしたんだから!!」

哀「わかるわよ。もしかして、奴等の物音を予感したの?」

コナン「ま・まあな。いよいよ現れる機会じゃないのか?」

哀「慌てちゃだめよ。変に動くとか酷い目に遭うわよ。」

阿笠「さあ、上がってくれ。」

博士の家の居間に入ると、風鈴が提げられていた。

それは、高知の悦子叔母さんから貰った風鈴に似ていた。

阿笠「この風鈴は、何年経っても衰えんのじゃろうな。」

コナン「ああ。年を追う毎に音色が美しくなるんだろうな。母さんが気に入るのがよくわかるよ。毅も“冷房より風鈴が好き。”と言っただらしいぜ。」

哀「風鈴の音色は、懐かしいことを思い出させてくれるわ。奴等が合図を送るためによく使っていたのよ。それに、夏なら涼しさを与えてくれるわ。」

コナン「そうか。遠くで明美さんが微笑んでいるだろうな。ところで、奴等が出そうな場所はどこなんだ?」

阿笠「うゝむ どどこじゃのう?」

俺達はあらゆる場所から情報を探した。

そのとき……。

阿笠「おやつ!!」Sound of gangs・bell「  
と関係するのじゃないかのう?」

コナン「Sound of gangs・bell」?ギャン  
グがよく鈴のような物を鳴らして仲間に伝言するあれか?」

哀「そうよ。タイトルを見て凍りついたわ。それは、犠牲者の悲鳴  
にも重なって聴こえるの。」

阿笠「明後日にでも映画館に行つて見るか?」

哀「前の台が怪しいわね。明映が劇場があるし、その足で行きつけ  
のバーに行くかもしれないわね。」

コナン「よし、決まりだ。前の台明映に行こう。」

2日後、俺と灰原と博士は「Sound of gangs・b  
ell」が上映されている前の台明映に向つた。

俺達は、恐る恐る奴等を捜した。

コナン「まだいないか?」

哀「大声出しちゃだめよ。背後から狙われるかもしれないわ。」

そんなとき、奴等のあの音が聞こえた。

それは、俺の心の中に聴こえた風鈴の音そのものだった。

鈴「チリーン、チリーン!!」

コナン「……(ついに来たな。今に見てるよ!!)」

阿笠「……(予感が的中したのう。)」

ジン「よし!!目当ての映画館はあの先だ。怪しい表情を見せるん  
じゃないぞ。」

ウォツカ「はい、冗責。」

ベルモット「小説同様、私達の本当の正体は謎のままかしら?」

ジン「そうだな。正体を語ってはいけないぞ。」

ベルモット「帰りにあのバーに行きましょうよ。」  
ウォッカ「そうだな。映画の予告にバーの場面があったよな。」  
コナン「奴等はやっぱりあの映画が目当てだったんだな。」  
阿笠「わしらも入るか？」  
哀「今は止めた方がいいわ。何されるかわからないわよ。」  
コナン「そうだな。慎重に様子を伺おう。」

そして2時間後の夕方6時前、上映が終了した映画館から奴等が姿を現した。

コナン「……………(ついに出てきたな。)」

鈴「チリーン、チリーン!!」

ジン「よし、紹興とコニヤックを捜せ!!」

ウォッカ「2人なら他の客の中に紛れているようですが……………」

ベルモット「相変わらず心配ばかりかけているわね。このままじゃ、バーでのひと時が台無しだわ。」

鈴「チリーン、チリーン!!」

哀「……………(奴等がサインを送ったわ。他にも仲間がいるのよ。)」

阿笠「……………(この中に仲間がおるじゃろうな。)」

コナン「……………(誰だ?出てきた客に怪しい素振りを見せた人はいないなあ。)」

紹興「ついに兄貴の呼び出しか?」

コニヤック「あの場所へ行こうと言うわけだな。」

コナン「……………(間違いない。あのバーへ行くぞ。)」

哀「……………(でも、すぐ行くわけじゃないわ。奴等はじっくりと見てから行動するのよ。)」

20分以上待った後、奴等はあのバーへと入った。

あのバーのドアにある鈴の音は、奴等の持つ鈴にそっくりだった。

バーの鈴「チリーン、チリーン!!」

哀「……………」(どうやら入ったようだわ。)  
マスター「いらっしやいませ!!」

ジン「今日は5人いるぜ。」

コナン「……………」(そうか、そうだったのか!!奴等の鈴の音は、行きつけのバーの鈴を基にしていたのか。)

帰り道、俺達に窮地が訪れた。

うっかり俺が声を大きくしてしまったからだ。

コナン「奴等の尻尾を掴んだぞ!!」

哀「ダメよ、無茶しちゃ。」

鈴「チリーン、チリーン!!」

ジン「何、土藤新一とシェリーが生きているのか？」

ウオツカ「よし、今がチャンスですな。」

ベルモット「たつぷりと可愛がつてやりましょうよ。」

ジン「よし、紹興とコニヤック!!裏も抜かるなよ。」

紹興・コニヤック「はい!!」

コナン「しまった〜!!」

俺と灰原は、慌てて地下街にあるコインロッカーへと向った。

紹興「どこにいるんだ、あの2人は？」

コニヤック「畜生!!どこなんだ？」

俺は慌てて、コインロッカーと飛び込んだ。

コナン「……………」息を止めよう!!」

ロッカーのドア「バチン!!」

俺が暫くロッカーに閉じこもっていると、奴等の足音と鈴の音が聴こえた。

鈴「チリーン、チリーン!!」

ジン「もしかしてこの中にあるんじゃないのか？」

ウオツカ「どうでしょうね、兄貴？」

ベルモット「人気の無い所によく逃げ込んだわね。もう逃げ場が無いわね。」

コナン「……………(ヤバい、もう限界だ!!!大丈夫かな?)」

ジン「どうやら誰もいないようだ。出るぞ!!!」

ウオツカ「今日の所はここまでにしましょう。」

ベルモット「元の生活を求めてそして敵を壊滅させようとしているboyは今日の映画に類似するわね。」

そして、大部時間が経ち俺達は博士から叩き起こされやっと出るこ  
とが出来た。

阿笠「新一、新一!!!」

コナン「博士!!!灰原はどこにいるんだ?」

阿笠「哀君ならもうとつくに家に帰つとるぞ。」

コナン「命を狙われそうになつたけど、生きているのは奇跡だよ。」

阿笠「これで、奴等は又闇に消えたわけじゃな。」

コナン「今度は絶対に逃がさないぞ。それに、鈴の音も。」

あれから1週間後、俺とおっちゃんは映画を観に行こうとしていた。

小五郎「おおつ!!!何だ?」Sound of gangs、

evil「?よし、この映画を観に行こう!!!」

コナン「本当?僕も行きたい!!!」

小五郎「子供のお前が観ても悲鳴を上げるだけだろ?」

コナン「心配しなくていいよ。あの話には、人情面もあるんだよ。」

風鈴「チリーン、チリーン!!!」

映画を観に行く話を聞いていた蘭は、びっくりした表情を浮かべた。  
蘭「ギャング?きゃ〜!!!私はごめんだわ!!!」

コナン「……………(風鈴の音を聞くと、未だにあの音が離れない。)」



恐かったあの日から大部経ったが、心の片隅では忘れられない出来事として鮮明に記憶されている。  
早く静かな日々が戻って欲しいよな。

- 完 -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0280a/>

---

黒の組織（やつら）に響く鈴の音

2010年12月13日20時41分発行